

藤井教授古稀祝賀晩餐会記事

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

6

(開始ページ / Start Page)

65

(終了ページ / End Page)

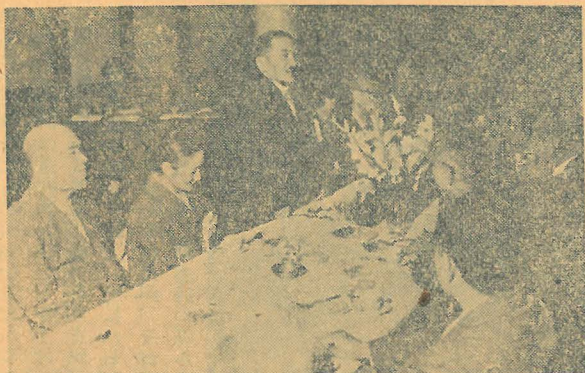
83

(発行年 / Year)

1953-12

藤井教授古稀祝賀晚餐會記事

昭和廿八年五月廿四日(日)午後五時より東京上野精養軒に於いて、本学教授板沢武雄先生・本学講師小西四郎先生方司會の下



藤井教授の御挨拶

に、藤井教授・佳珠子夫人及び長男光之君(鐘紡化繊課長)を招待して藤井教授古稀祝賀晚餐會を開催した。來会者は本学総長大内兵衛先生、文学部長谷川徹三先生、理学博士黒田長礼元侯爵、右派社会党三輪寿壯代議員、自由党参議院議員、自由党参議院議員、奥駈女子学園理事長、奥駈女子学園理事、京都帝国大学・九州帝国大学・東北帝

国大学にて受業の諸先生、日本歴史地理学会、開国百年記念文化事業會、黒田家英学会、元維新史料編纂會の明治文化研究会關係者、福岡県出身者、友人知己各位、夫れに本学卒業生の諸氏、遠くは佐賀より、広島より、京都より態々來會せられた方合せて百二十余名、和氣調々の裡に、滞りなく會は進行した。是日朝疊後清朗、上野の新緑又格別であつた。

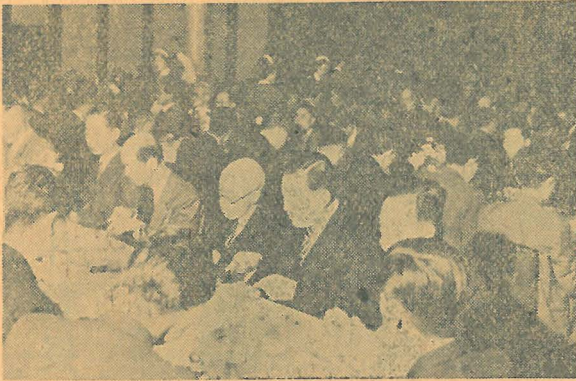
開會

先づ小西四郎先生(東京大学史料編纂所員)司會して開會、板沢教授立つて、開會の趣旨と事業の経過とを述べられた。

○板沢武雄先生(本学教授)

僭越ですが、実行委員の一人として藤井先生古稀祝賀會の経過を御報告申し上げます。

藤井先生には本年三月二十五日、目出度く古稀の寿をお迎えられたのであります。ところが御覽の通り、先生は非常なお元氣で、今日お年寄めいたお取扱を申上げるのは如何かと考えたのであります。実は先生還暦の機会に、早くもこの祝賀の議が持上りまして、有志の間に、話が充分進行したのであります。



会場を極めた盛況

たが、戦争のために実現を見なかつたのであります。左様なことから今回は是非共お祝いを申し上げたいという気持がより／＼皆の間に盛上つて来たのであります。取あえず数名の者が、先生の御内慮を伺いに参上いたしましたところ、御謙遜な先生は初めお受け下さいませんでした。それでは折角なことであるから、皆様方に成るべく御迷惑の係らないような程度でやつて貰

いたいと、こういうことで御承諾を得まして、早速皆様のお手許まで御支援をお願いする書面を差上げた次第でございます。処が早速御返事がありました。或る先輩の一人からは、藤井先生のような元氣な方に古稀とは何事だ、よろしく参議院に送れこういうお叱りの手紙が舞込んだのであります。これを以つて見ましても、先生を誰

しもさようなお年寄扱いをしておらず、今後益々先生の御活動に期待をお願いしている次第でございます。私ども企画をいたしました者も衷心から、先生がいよ／＼御壯健、ますます御活動あらんことを念願する意味から、この会を催しましたことを、ここに改めて明らかにしておきたいと思ふのであります。さて只今まで三百七十四人の方々から五百七十七口の醸金の御賛同を得まして、本日は又百二十九名の方々の御來会を得ましたことは、これ偏に先生の人徳のいたすところではございますが、又各位の厚い御志の賜物で、関係者一同感激いたしておる次第でございます。さて記念品代として醸金を得ましたうちから、本日先生の記念の撮影をいたしましたので、この写真を引伸しました額面を二面調製いたし、一面を先生の自宅に、一面を現に先生が主任教授として非常な熱意を以つて護立てておられます法政大学史学研究室に寄贈さして頂きたいと思ふのであります。で、あとは近く来月の初めに実行委員会を開きまして清算の上、残金を記念品代として先生に贈呈したい、と考えておりますが、詳しい報告は印刷物を以てお手許に来月初旬には差上げられるだろうと存じますので、この点御了承を願いたいと存じます。なお先ほど司会者の方からもお詫び申し上げますが、私どもの不馴れのため、本日はお席次万端行届きません点が少々あろうと存じますが、その点何卒御寛恕の上、どうか本夕はゆる／＼皆様と共に歡を尽して頂きたいと切望する次第でございます。

なお最後に余分なようでございますが、私共が本夕この記念の会をこの上野の精養軒に設けましたことについて一言申添えます。承りますすれば、先生御夫妻には実にこの場所において華燭の典を挙げられた、こういうことの縁ある場所を特に考えて、会場を選んだ次第でございます。先生今日あるは全く先生の御努力にもよりますけれども、永い間の令夫人の御内助の功誠に大なるものあることを私どもは確信いたします。幸い本夕は令夫人並びに御長男様がはる／＼御出席頂きまして、皆様と共に藤井先生御一家の隆盛を祈ることを得ましたことを、司会者といいたし幸いとして申添えておく次第でございます。(拍手)

次いで日本歴史地理学会理事岡田章雄先生(東京大学史料編纂所員)の手より一同拍手の裡に記念品代を贈呈し、次で本学総長大内兵衛博士の音頭にて一同「藤井先生万歳」を三唱して乾杯の儀を行ひ。次いで旧藩主黒田家の当主黒田長礼理学博士の祝詞あつて、晚餐の間諸氏立つて祝詞を述べ、藤井教授の学徳を頌し、其間左記諸氏より致された祝電等を、本学竹内直良教授より披露があつた。

東北大学教授
 東京都帝国大学教授
 元文部省維新史料編纂会編纂員
 同郷の親友
 参議院議員

豊田 武先生(仙台)
 西田 直二郎博士(京都)
 岡田 実先生(鎌倉)
 荒木 駒雄博士(福岡)
 常岡 一郎殿

(広島の旅先より)
 最高裁判所判事、元九州帝国大学教授 河村又介博士(東京)
 来会諸氏への謝辞を含めて 教授の姉上篠崎ちか殿(福岡)

賀藤井畏兄之古稀二首

元三井鉱山株式会社重役 小田 清殿
 元三成金山株式会社社長

肝胆傾尽比同胞

五十年來莫逆交

了得君家長寿訣

承天祿不患厨庖

燃犀史眼如烘炬

浩漭著編余汗牛

令望於君垂百世

憫他榮耀俟時流

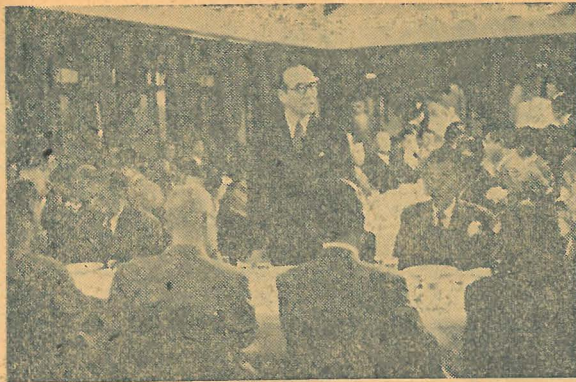
祝辞は黒田長礼博士、本学文学部長谷川徹三先生、三輪寿壯代議士、小野秀雄教授、萼沼繁枝女史、柴田実教授、岡田章雄先生、時野谷勝教授、渡辺省三助教授、垣見八郎右衛門殿より述べられた。宴將に終らんとする時、最後に、元文部次官参議院議員 黒木亨弘先生立つて祝詞を述べ、議員の音頭によつて「藤井甚太郎先生万歳」を三唱、一同唱和し目出度感宴を終つた。

祝 辭

席上、諸氏の述べられた祝辞の大要を茲に録する。

○黒田長礼博士 (旧福岡藩主家当主元侯爵)

藤井教授の家と私の家とは昔から代々二百年の親密な間柄に



谷川文学部長の祝辞

あります。のみならず黒田奨学会という会を持つておりますが、その会の理事といたして藤井氏は非常な努力をされ、氏の人格、学徳等によつて幾多の優秀なる学生を指導されて、その人達が世に尽しました功績は、少くないと思います。これは偏に藤井先生の指導の賜物であります。又福岡藩の歴史につき研究を積んでおられます。福岡藩からは古くは貝原益軒又近くは井上哲次郎先生が出ておられます。この

人々の残した業績、殊に貝原先生は六十代を過ぎた後において、学問を完成されたように承つております。ですから今後藤井氏は養生をせられこの上も長寿を保たれ幾多優秀なる業績をお残しになるように希望する次第であります。これは自分のことで、甚だ失礼ですが、直接藤井氏に関係のあるこ

とですから一言申添へます。私が襲爵の仰せを受けました時に、祖先の歴史につき極く不案内であることが多かつたために、特に藤井氏に委嘱いたし、随時私の家で講座を設け、私夫妻、長男等が参席いたし、藤井氏から三四百年の昔から現代近くまでの一々詳しい歴史を承つたのであります。そういうような関係もありまして、今日ここに古稀のお祝いを申述べることが、非常に愉快であり、めでたい次第と存じます。(拍手)

○谷川徹三先生(本学文学部長)

藤井先生と法政大学における同僚の故を以つて、この席に参上し、お祝いを申述べます。実は今日は旧一高、今の東大教養学部で安倍能成さんの古稀祝賀会がございまして、私は出席したばかりであります。安倍さんは藤井先生より少し月にしてお年を召されてはいますが、今日伺いますと安倍さんのお母さんは九十幾つまで御存命だつた人で、安倍さんも九十過ぎまで元気である活躍なさるだろうということに一決したのでございます。ところが藤井先生も安倍さんに劣らぬお元気で、只今の祝電によりますとお姉上はまだ御郷里でお元氣のようでございますから、多分一家御長命のお家であらうと思ひます。

学校の同僚といたしましては、私は藤井先生が実に精勵格勤、若い人たちの先頭に立つて熱心にお仕事をなさつて下さつてゐるのを、常々拝見いたしてゐるのであります。又どんなことと対しても常に誠意を以つて実に疎かにしないで尽して下さ

つてあるので、私ども平生非常に感心をいたし、又感謝もいたしている次第でございます。

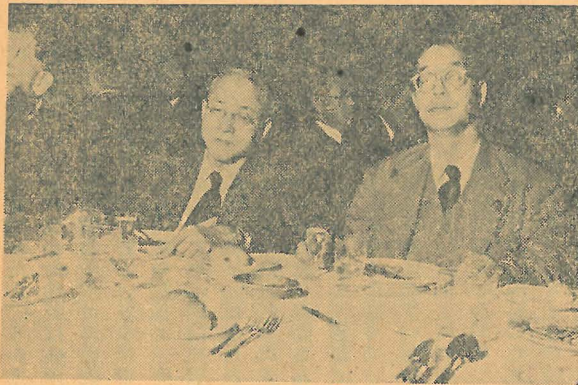
今日安倍さんの祝賀の席では、寮歌を歌い、安倍さんも先頭に立つて若い人たちと一緒に会場を踊りまわつたような状態でございました。私は藤井先生はやはり安倍さんと同じように九十過ぎまでお元氣でお働き頂ける方であると存じます。そういたしますと、人生五十とすれば藤井先生はまだ三十のわけですから、どうぞ皆さんも精々若いお氣持になつて、このめでたい席を少しでも賑やかにして頂きたいと願います。(拍手)

○三輪寿壯先生(衆議院議員)

私は藤井先生の同郷の後輩といたしまして、今日このおめでたい席に連ることを感謝いたします。本日は誠におめでとうございます。

私の郷里は、丁度藤井先生の郷里と一里程度の近い所でございます。私が東京に出て参りますと東京で同村の先輩で今は故人明治大学の北崎進先生のお宅に同郷の学生がお世話になり、そこで郷里出身の学生が、いろ／＼と先輩の話を伺つたりいたしておりました、その会合には必ず藤井先生がお出でになり、私ども田舎から出て参りましたばかりの学生で、まあ田舎者でもありましたが、併し一面には非常に生意氣なようなところがあつたと思いますが、そういう学生を前にいたしまして、先生持前の非常に温厚な態度で而も親切に、そして先ほどのお

話にもありましたように誠意溢れる態度で色々御指導を受けましたことを、もう三十数年になりますけれどもまぎ／＼と想い起しますのでございます。先生もお年をお召しになりましたのでありましようが、私も又年をとりました故か、どうも先生の御容貌なり態度なりがその頃と余り変らないような錯覚を持ちますようなわけで、それほどその当時におきまして、先生は



向つて左より大内総長、三輪寿壯代議士

まあ言つてみますると老成した本当に人の出来た方であつたのでございます。又それ以来ずつと同郷の後輩として御指導を受けて参りましたが、先生の明治維新史料の編纂、その他歴史家としてのお仕事、それから学校の先生としてのお仕事、こういうものと一緒に今申しましたような同郷の後輩に対しましても、非常に御親切

な態度で指導されたということを、私は皆さん方に御披露申し上げるわけでございます。先生ますくお元気でおられますので、まだお残しになつておるお仕事は多々あるうと思ひますので、どうかこれからますくこのお仕事の方で御努力を願ひまして、大きな仕事を我々後輩のために残して頂きますようにお願い申し上げます。(拍手)

○小野秀雄先生(日本新聞学会々長・元東大教授)

実は新聞記者を長くしておりますで、一つ新聞の歴史を書いてみようという気になりまして、それで初めて歴史学者の門を潜ることになつたのでございます。その時に考えました一人が藤井甚太郎先生でありました。その時私ども余ほど偉い先生だと思つておつた。今伺つてみるとやつと七十になるかならないか、私すでに六十八になつておりまして、私より僅か二年先輩で、実は余り尊敬し過ぎたことを後悔しております。(笑声)

そんなわけで藤井さんの本を読み、維新の歴史なんかを知りまして初めて歴史の面白さを知つたのであります。もう一人私と郷里の先輩で東大の史料に中村勝麻呂という維新史の権威者がありました処がこの方は余ほど政治的な感覺がある、藤井先生は絶対にないどこまでも学究なんです。偉い人が世の中にあるものだと思つて、それからまあ大変お世話になりました。辛うじて七、八年かかりまして日本新聞史を書いたのであります。が、そうしましたら吉野作造氏が君の歴史は非常に面白い、一

つ明治文化研究会を設けたらどうかというお話であつた。それは面白い明治文化研究会を作れば色々な先生がいらつしやるので大いに助けになるだろう、こんな話から尾佐竹猛、石井研堂、それから宮武外骨、外骨というのは吉野先生の教室で政治史の史料を集めておつた。その關係で、それからここに見えております渡辺幾治郎先生、これは明治史研究の先生で先輩でありますけれども、此人達を集めねばならないことから、話が進みまして、どうしても藤井甚太郎先生は一つお願いしなければならぬという話が出た。吉野さんは非常に偉い人で自分で藤井先生宅に行かれた。そして吉野さんの家で明治文化研究会を開きました。まあ皆素人の集りで、中で相当研究してをつたのは尾佐竹猛君くらいのもので、藤井先生が一番専門家なんです。丁度明治文化と徳川文化との間の繋りを先生にいろく指導演つて我々大いに得るところがあつた。それで同人連中の手で明治文化全集というのを編纂した。皆な真面目に仕事をしたのでありますけれども、どうもその仲間が非常に短命で、吉野作造氏が一番先に死んだ。尾佐竹猛氏が終戦後すぐ死んだ、石井研堂氏が終戦の一才前あたりでありましたが死にました。宮武外骨翁は極めて老年になつた。結局創立者同人は藤井先生と私と二人だけ、そのうちに明治文化はだんく若手の仕事になりました。木村毅氏が世話してゐる。大分空気が變つて来て社会的な研究団体になつた。一つ藤井さんどうだろう本当に研究の好きな人々が集つてやろうじやないか、という話を私はしま

した、藤井さんは非常に賛成されその後も大分賛成がございました。ところが御承知の通り皆引ばり廻されて、なかなか明治文化研究会を作る折がない。どうか一つ若手の方で本当に好きだという方をお世話なすつて組織して頂きたい、我々喜んで参加いたします。まあそんな訳で大変に藤井先生にお世話になりました。第一の社会先輩です。この人に参られると私はその次になる、どうも尻が落つかない。さつきも藤井さん一つ百才まで生きて下さいと大いに激励した。どうか藤井さんお任せで、奥さんも御壯健で、立派な御令息をお持ちで誠にお羨しい。私も家内は持つておるが、子供がない、人がいい子供を持つていると羨しくてしょうがない。(笑声) 誠に藤井家は多事多福でありまして、これから何年生きられても、藤井さんは誠に社会のため、学界のため、又国家のためになるのでありますから、どうか百才の長寿を保たれ、立派な業績を残されるよう心からお願いたします。甚だ僭越であります。(拍手)

○藤沼繁枝先生(実践女子学園理事長)

藤井先生お目度うございます。先生が得がたい学者で、人格者でいらつしやることは、私申上げることもないと思えます。昭和六年から私のほうの実践女子学園も大変お世話になり、或るときは専門学校の校長として、又大学になりました時には色々とお世話様になつたのでございます。殊に戦災を受けました時に本が一冊も残らず焼けてしまいました後、図書館長

として、なりもふりもお構いにならない方なんですけれども、大きな本の包を背負つていらつしやつて頂いたり、いろ／＼お世話になりました。皆様おつしやいましたように、お元気で若うございますから。実はもつとお若いかと思つておりましたのに、今度古稀と伺つたものですから、それではどうぞ私共も一緒に参つて祝わして頂きたいと思ひまして、伺つたわけでございます。どうもいろ／＼と長い間お世話頂きました。どうぞ先生お元気でお栄えになりますように、又私どもの学校もどうぞお世話頂きますように、お祝いを兼ねましてお願い申し上げます。(拍手)

○柴田実先生(京都大学教授)

京都大学で藤井先生から教えを受けました一人として、この席に連ることができましたことを、大変喜んでおります。先生が初めて京都大学に維新史の講義においでしたのは、たしか大正十四年のことと思ひます。当時私はまだ入学早々でしたがその翌年その講義に連ることができたのであります。先生の御講義は極めて行届いた、短い期間の間に維新史のすべての問題に亘つて洩れなくお話頂きましたばかりでなく、これから先維新史を研究します者のことを考へて、いろ／＼と史料とか、なお研究の残されている問題とかを御指示を頂いたのであります。其頃御出版になつた明治維新史講話は恐らく京都大学における御講義が一つの機縁になつたのじやないかとひそかに拝察

いたしておりますが、あの書物は今日明治維新の概略を知る上に最も簡潔にして要を得、記述が一番正確で信頼のできる書物だと思っております。御講義中藤井先生はかりそめにも皇室に對する不敬などということは一度もなく、敬意を払つておられ、又徳川將軍家とか、或いは旧藩主黒田家などについても、いつも我々に話す時に敬語を用いておられた、私には印象的に残つておりました、それは先生のお人柄の然らしむるところであろうと存じますが、歴史家としての先生は過去の人物に對しても極めて同情的な見方をなさつて、それが勤皇の側に立つた人であろうと、佐幕の側にあつた人であろうと、それらのそれ／＼の人物がそうせざるを得なかつたその地位、境遇等から來るところの苦衷とでも言うところをよく汲んでお話なされました。当時私どもはまだ若かつたのでありますが、維新のような烈しい変革のときに當つては、進歩的な立場に立つ人も、保守的な立場に立つ人も共に時代の制約を免かれないうで、而も最後は時代の方が先へ其等の人をとり残して行くというやうなところが、ひどく感を受けたことであります。先生は単にそういうやうに過去の人物に對して同情的な見方をなさつてゐるばかりでなく、私ども後進の者に對しても非常に親切で、我々が学生として東京へ見學旅行に参りますと、維新史料編纂会の所蔵史料の縦覧とか、黒田家などの平常容易に拝見できないところの古文書、あの有名な漢委奴国王の金印など、我々学生として拝見のできましたのは、実に藤井先生の御斡旋によつた

ことと未だに深く感謝いたしておる次第であります。先生はその後昭和のはじめにヨーロッパへ史料の探訪にお出かけになりましたので、そのお留守の間は同じ維新史料編纂会の今は故人の大塚武松先生が代つて京大において下さつており、その後たしか隔年交替くらいで昭和の十四、五年、ちよつとこの辺正確でございせんけれども……、其頃までお越し頂いておりましたので、前後恐らく十數回お越し頂きましたと思ひますが、先生の門に学びました者も京都に相当多いのであります。今日もこの席にもつと大勢上るべきであつたのであります。今日も、いろ／＼の差支えができて來られなかつたことを皆残念に思つておりました、私から代つてお詫び申し上げます。戦後一時大変お老けになつたやうにお見受けしたことがあつたのであります。昨今又すつかりお元氣におなりになつたようでありませう。まだお元氣で御活躍あらせられますことをここにお祈り申し上げます。(拍手)

○時野谷勝先生(広島大学教授)

甚だ僣越でございますが、藤井先生に非常にお世話になつた關係で、一言御挨拶申し上げます。今から二十年前、昭和六年頃に、先生が京都大学の講義にお見えになりました際、私は受講者でございます。その前年、先生がヨーロッパに御留學になり非常にスマートになられたそのお姿に最初に接したわけでありませうが、京都でのいろいろな學問的な、これは只今柴田教授か

らお話がございましたので省略いたしますが、ただ私も学生としまして非常に先生のお人柄に親しみを感じたわけなのでございます。当時の教授の方々より一層人間的に非常に親しみを感ずる、まあ平たく言えば親父のような感じを持つたわけなのであります。事実又私共のような学生を自分の子供として寄せられておりました、打あけたことを申上げて恐縮ですが、その当時、幾許かの京都大学からの謝礼が公式に出たわけなんです、先生は京都で貰つた謝礼は一切京都で使つて帰る。こんな金は東京まで持つて帰るつもりは毛頭ない、そういうお考えをとられまして、私どもにしきりに奢つて下さるわけなんです。別にまあそれに買収されたというのを申上げるわけじやないのですけれども（笑声）、とにかくお茶でも飯でも金のある限りは奢つて下さる。そういうことで今でも親父の脛をかじる件というふうな気持ちで先生に接して参つたわけなのであります。

その後私、大学を出ましてから後、文部省の維新史料編纂事務局で、再び先生と同じお部屋でお世話になりました。実は本夕維新史料編纂会関係の方が多数見えておりますが、私どもがこれを代表しましては甚だ僭越なでございますが、私が結局御挨拶申上げるわけなのでございます。やはりこの維新史料へ入りましてから後も、親父的な風格はちつとも変らないわけなんです。現在私ども三等教授か四等教授くらいをやつておりますけれども、藤井先生に見習つて「学生や助手なんかを奢つてやろうという志だけはあるのですけれども不可能なんです（笑声）。

そういう点でまだ先生のお教えを実践しておりますけれども、維新史料へ入りましてから後も、又教職に就いた今日日まで終始その脛をかじり続けて来た一人なのであります。実際お見受け申上げますと年と共に非常にお元氣になつておられます。まあいわば現役のちやきくでございます。願わくばまだ将来長く活躍されまして、慾を付加えますれば私ども伴どもがもつとその脛をかじれるように、こういうふうにお願ひ申上げ次第でございます。（拍手）

○岡田章雄先生（日本歴史地理学会理事）

日本歴史地理学会は、御承知のように非常に古い学会で、私のような末席を汚しております者が代表としては、非常に僭越なことでございますが、都合によつて私から御挨拶を申し上げます。お目出度うございます。承りますると先生は初めて日本歴史地理学会に御関係になつたのは明治三十九年、それから明治四十二年、先生がまだ学生の頃に太宰管内志八十二巻の校訂をして日本歴史地理学会から出版になられたというお話でございますが、その頃ですと、まだ私などは母の懐の中ですやくと眠つていた頃でございます。その頃からすでに歴史地理学会の為に非常に立派なお仕事をなさいます、長い間いろいろ今日の斯会の発展の為に御苦勞を重ねられておりましたが、私が幹事をしておりました時に、終戦前に雑誌を一旦休刊の止むなきに至りましたことは本当に申訳ないと思つております。戦後非

常に物資が窮乏し、又雑誌の再刊などは到底おぼつかないような時期に当りまして、先生がいろ／＼御奔走下さいまして、新しく「歴史地理」の再刊の途を開いて下さいまして、その途に従いまして、私どもが僅かながらの力を振つて参つてゐる次第でございます。先生にはいつも私どものために月々の例会或いは理事會に必ず御出席下さいまして、後輩のためにいろ／＼御支援を下さいまして、又何かといろ／＼お世話下さいまして、私たち一同本心に心から感謝申上げてゐる次第でございます。

(拍手)

○渡辺省二先生（大妻女子大学助教、法政大学卒業生）

藤井先生には非常に御厄介になりました。先輩の方も全国に少くとも数千の方がいらつしやることと思いますが、どちらも今日のお祝いを非常に喜んでいらつしやることと思います。定刻前から既に諸先生から、先生の御高德についてのお話がありました。私にはまあ藤井先生の片鱗を二、三申上げて見たいと思ひます。先生は全く私どもの学生達の中心であられました。学校などでは、率直に申すと、一部の学生達にはやんちゃ共が沢山おりましてな／＼面倒でございますが、藤井先生は謹直な者達は無論やんちゃ共も非常によく敬服いたしてあります。これは偏に先生のお徳のしからしむるところと思うのであります。又藤井先生の、多年御研鑽を経られました御研究やら、いろ／＼の点が、学生達を圧倒的に心服させたと思うの

であります。今お話がありましたような美德がたくさんございしますが、非常にいいところがあるのであります。前かがみの、少し猫背のお姿でありますとか、お国言葉まじりのユーモアたつぷりのお話振りとか、それから非常に丸いくるくる回転するお眼玉とかいうようなものが、非常にチャーミングであります。学生達も藤井先生には、一步を置いておりました。いつも私どもが藤井先生にお眼にかかりますと、壯者を凌ぐような、非常なお元氣なお姿であります。これには非常に私も驚いております。これは先生が歴史の大家でいらつしやるものですから、例の秦の始皇帝が手に入れなかつた不老長寿の、何かホルモンをお見付けになりました、こつそりと常用なすつてゐるのではないかと思つております。(笑声) どうかまあ我々にも一つ、特別講座を開かれまして、藤井先生の教え子や、又藤井先生取巻く縁故者に、先生の長寿法を御伝授頂きたいと思ひます。還暦、古稀は勿論のこと、米寿までも、不老長寿を全うせられたいと願うのであります。(拍手)

尙当日は藤井家祖先の縁家垣見八郎右衛門氏より藤井教授の謝辞に因んで祝辞を述べられた。

○垣見八郎右衛門殿

三百年前の縁ありと話された垣見です。昭和三、四年の頃麴町区史編纂の為、御訪ね申したのが初めて、茲に三百年の縁が甦るのであります。只今話された通り垣見が出陣する。その後

を藤井先生の先祖が引き受けられた云云、これは私方の系図と合致する。そこで親族の交際をいたし、十三年前に長男次男の結婚式にも御列席を願つた。終戦後お互に交通が中絶していたが、先頃日本工業倶楽部に参りました時、藤井さんの消息も判り、交際いたしています、此度は関西の方への旅行から去る十九日帰ると御案内を受け、出席いたして、心から御喜びを申し上げます。(拍手)

謝 辭

○藤井甚太郎先生

今日は誠に有難うございました。実は私、古稀の祝賀の会をお開き下さるような日に会うという事は、毛頭考えていなかつた。然るに今日は、諸先輩及厚知がたが多数御参集下さつて、此丈の盛大な宴をお開き下さつたことを、実に心から感謝を致しております。私ばかりでなく家族の者までもお招き下さつて、この者共も親爺はそんなに偉かつたのかなあと疑いながら難有かつていると思います(笑声)。家内もこれは何十年か考えが違つておつたと考え、明日あたりから私に対する態度を変えないかと思ひます。(笑声、拍手)。併し私が今まで皆様方からお褒めのお言葉を頂戴いたしたが、穴にでも入りたい気持ちであります、当節柄太分心臓を強くしておるのでありますけれども、誠に恐縮いたしております。あれは藤井に對

するインフレーの評価でありますから、平価切下げて御開取置を願ひたいのであります。先づ私が世の中に出ます時の、最初の第一歩を申上げて置きたい、これは私が、如何に今日の御催しを有難く思つているかといふ事、材料にもなり、又先ほどお話のあつた長寿法にも関係のあることであります。(拍手)

私は中学を出まして、それから上の学校に進む学資もなければ、勿論学才もない者です。郷里の小学校の代用教員をしなければならぬのだと、深く覚悟をいたしました、それから先多少の地位の上りますことは、これは儲めのだという考え方をいたしたのであります。偉いお方の伝記を見ますと「幼にして大志あり」と書いてありますが、私は幼にして、実に人生の下の方を標準と致して来ておるのであります。昭和十五年の十二月に、今上陛下に御進講の光榮を得ました。この時にも退下いたしました後に、自分も流れ流れて、とうとう御所の御学問所まで来たという気持ちであつたのであります。つまり私の人生の標準は常に小学校の先生にあつた。今から考えて見ますると、中学卒業の時に境遇上のショックを非常に強く受けたのじやないかと考えているのであります。でありまして、今日ここまで参りますに就ましては、私自身の努力、私自身の天から亨けている才能というものは、少しも無いのでありまして、自分が偉いなどということ、曾て考えたことはない。自分はつまらない者だと、常に考えているのであります。これが私のいわば処世観と申しまするか、長寿法と申しまするか、人生標準と

なつていたのであります。でありますから、ずつと今まで来まして跡を振返つて見ますと、自分でやつたことは少しもない。皆人様のお蔭で参つていたのであります。全く他方本願のお蔭であります。これを具体的に申し上げますと先づ高等学校まで行く、卒業した、では大学に行つてみようか、そしてともかく大学まで流れて、卒業をしました時に、ハタと困つた。学生時代は義兄から学費を貰いましたが、卒業すると左様には参らない。明日から就職をしないと、自分一人が路頭に迷うのみならず、老いた両親が路頭に迷ふので、心配をいたしてました。実は私は高等学校に入学しました時、金壺千四也の生命保険をかけて尙今日もそのまま続けています。今私が死去いたしますと、私の体よりはこの洋服のほうが十倍位高いのであります。幸いに大学卒業の時に、渋沢青淵先生のお家に、十五代將軍徳川慶喜公の伝記の編纂が始まつていました。それに先ほどお話になりました日本歴史地理学会の幹事を致させて頂いてお蔭で、喜田貞吉先生や、藤田明先生の御推挙、三上参次先生萩野由之先生のお世話になりました。徳川慶喜公伝記編纂所に御採用して頂いたのであります。そこで一年も前から非常に心配をいたしてました就職に就いては一日も失職の苦痛を体験しなかつた。これは全く渋沢青淵先生のお蔭だと、今日でも思つてるのであります。この編纂所にお世話になつていました中に、維新史料編纂会というのが文部省内に出来ました。これは維新の史料を編纂するのであります。殊に維新の史料編

纂でありますから、昔の藩というものの色彩を非常に持つておる編纂所であります。ときの副總裁が、同じ福岡藩の出身であります金子堅太郎伯でありました。そこで私が、先ほどからお話のありましたように、福岡藩士の家の者でありました関係上、維新史料編纂局の方に参れと金子伯から繰返し申されたのであります。その時に私が申しました。私は渋沢青淵先生のお蔭によつて、人生の一大事、分れ目と云ふ就職について一日も失職の苦痛を嘗めてはいない。これは感謝に堪えない。で青淵先生の御意思に反して、自分の進退は一切せないのだと、金子伯に申したのであります。それでは自分が渋沢子爵に会つてお話をしようということで、兎町の渋沢子爵の事務所に伯がお出でになりました。そのときの話に、藤井は青淵先生に対して非常に御恩を感じているけれども、これはまあ十年の御恩だと思ふ。併しこの度のことは、事旧藩主の黒田家に関係のあることであつて、藤井家が黒田家から御恩を受けているのは三百年、(笑声)十年と三百年は大分違ふようであるから、どうか藤井の身柄は私の方に下さい、(笑声)と金子伯がいわれて、それでは半分分けにしようということになりました、(笑声)一週間の内に三日渋沢編纂所に行き、三日は維新史料編纂局の方に勤めたような次第であります。それから又今日は京都大学の方のかたがお出になつておりますので、これに就きまして、一事申しますが、坂口昂先生が文学部長でありました。私に講師になつて参れという話がありました。そのときに、維新史料

編纂局の方には、私よりも先輩が五、六人おられる。それに私
 丈が京都大学の講師になつて行くことは、私と深い関係のある
 金子副總裁としては、ちよつと立場に困られる場合である。で
 私も種々お願をいたしましたのでありますけれども、仲々許可が局
 の方出不ない、或る時に局長から、「この事に就いては金子伯
 と君とが同郷であることを、君に対して同情する」と、いわれ
 ましたので、それならばよく判ります。それでよろしうござい
 ます。私は金子伯を苦しい立場に追い込もうという気は無いん
 だからと申しました。それに対する坂口文学部長の御処置に、
 私は今以て感激をいたしてゐるのであります。まあ普通に考
 えますれば、それでは致し方が無いと挨拶されてお終になるの
 であります。その時に坂口文学部長はそれではこの話は保留
 しようといわれました。それで翌年に、又その話が出ました時
 に、金子伯も、そう二度も重ねていうならば、これは承知して
 も同僚の皆さんに對して非難も受けまいだろうから、といわれ
 まして、今柴田教授からお話がありましたように、大正十四年
 度から昭和の十七、八年頃までですが、十数回講義に参つた次
 第であります。今京都で貰つた金は京都で使うんだと、偉そう
 なことを私がいつたようにお話がありました。そんな偉いこ
 とでも何でもないのであります。私はよく学生に言つておつ
 た、自分は文部省で月給を貰つており、京都の方でも又金を貰
 つてゐる。二重に貰つておる。あなた達て親の脛かじりだから
 僕がコーヒーをご馳走する。(笑声)けれども、学問上の話は

しない。学問の方は、皆先生方がやられる。これから先諸君が
 卒業しての後の世の中と申すものは、非常にむつかしいのだ、
 君達は書物に書いてあることは、何でも読めるのだから、それ
 を今僕がいふ必要はない。書物に書いてない世渡りの途を、こ
 れから教えるから。(笑声)それでひまのある者は、一緒にお
 茶を飲みに来なさい。と申して連れで行つた。決して買取する
 なんていう、(笑声)そんな卑怯なことはいたしません。そし
 てお茶を飲みながら世間話をいたしました。例へば東京の丸ビ
 ルのように化粧煉瓦をして一分の隙も無い建物は、見た処如何
 にも奇麗であるが、雀一羽巢を懸けない。廃墟のように煉瓦が
 落ちたり毀れたりしていると、雀や鳩や鳥も巢を営む。人間も
 同様、人の上に立つには少しは人間に隙間がなくては子分が出
 来ないとか。宮本武蔵と云う劍道の達人は長短二本の木刀を持
 つてゐる。世の中が六ヶ敷なると、諸君も二本を持つて世を渡
 らないと、路頭に迷うとか。国元に親のいる学生は、三度の食
 事は二度にしても親の急病と聞いて帰国の旅費は常に肌身を
 離すな、僕は親の病気の急電に接して汽車賃を工面して一日帰
 国が後れた為め親の死目に会はないで一生取りかへしのつかぬ
 一大恨事を経て来たとか。凡て世の中のこと湯加減と云うこと
 を考えて処して行きなさいと云うことなど、四方山の俗事を話
 して聞かせたのであります。

今申しました宮本武蔵のことでありますが、私は幼少の頃か
 ら宮本武蔵の二刀流の劍術を教はつていて、例の阿呆構で世の

中を渡つて来た、何処からでも相手から打ち込まれる様な、隙間だけで七十年を過ごして来た。是れは劍術の修業から来ているのではなくして、本来の阿呆からであつて、大極は無極と一致する訳でありまして、皆人様がよいようにして下さつた。

維新史料編纂会に三十余年御世話になり、それから実踐女子学園の竹内前理事長蓼沼現理事長の御世話で、実踐女子専門学校となり今実踐女子大学の教授を兼任いたし、又開国百年記念文化事業会の理事を勤めますのにも羽田会長劍木元理事長日高現理事長等の御世話になり、法政大学に奉職いたしますには竹内丸山両教授等の御推挙によつて大内総長谷川部長の御世話になつていますような次第で、皆人様の御世話にばかりなつています。独り先輩諸先生から引き立てられたばかりでなく、若い方々の御世話になつています。先に申しました御進講の光栄に浴しました時なども、心当りの筋々を探しましたが、誰が推挙したのか一週間許り判らない、漸く私よりも後輩の山田侍従が言い出し、石川東宮伝育官長、今の国学院大学長ですが、御推挙して下さつたことが判り、急ぎ御礼に参つた様のこと、ですから実を申せば、今日の会の如きも、私よりして七十年間御世話になりましたと一席を設くべきが順当である位に思つています。従つて今夕の会は入感謝いたしています。相変らず先輩からは引立てられ後輩からは推され、流れ流れて今日に至つたのであります。推され引き立てられながらも、自分はずつたらぬ奴ぢやと常に考へています。左様な心構ですから、一面から見

ますと、私の行動が非常に鈍な処があります。そこで今日御出席なさつている吉田常吉サンが、かつて私を評して、「藤井先生は石橋を叩いて渡らぬ人ぢや」と評せられた。此は確かな批評で、本人謹みて御請を申します。

先程三輪サンから若い頃の御話がありました。此席を借りまして、三輪サンに御託を申さねばならぬことがあります。その頃何かの会の帰りに、日本橋の方から須田町の方に、三輪サン達と一緒に徒歩で本郷の方に向つて歩いて参りました。確か大正十二年の震災前でありましたが、三越の店頭に金物のライオンが据つてありました。私元来野次馬でありましたので、そのライオンに乗つて見たくなつた。処が御覧の通り私短身尺足らずでありますので、乗れない。処が三輪サンが、では私が踏合にならうと云つて、四這になられた。そこで三輪サンを踏合にして、ライオンに跨つてよい気になりました。今考えて見ますと、誠に勿体ないことを致したと考えています。今深く御詫びを申し、重ねて三輪サンのお性格の片鱗を申し上げまして、國民の爲めに喜んで踏台に甘ぜられる方であることを、特に東京都第三区有権者の方に御紹介申して置きます。

尙先程司会の方より御話のありましたが、或る方よりして私を参議院に送れ云云と申されたのであります。私は私も政治には興味を有して、昭和十年頃立候補の野心を感して、懇意にいたしました政友会の領袖の小泉策太郎、これは御承知の方もあるかと存じますが、三申と号し名文家で

あり、かつて横田千之助氏と並び称せられた政友会の大策士であります。この人の鎌倉の邸で朝から晩迄話しを致して立候補の相談を致しました。処が三度の食事よりも政治が好きの同氏が、政界奔走の苦心主として党内小派を繰繰する苦勞と金のかゝることを打ち明けて話して呉れまして、その苦勞と金を学問の研究に費した方が、君の爲でもあり国の爲でもであると、懇々と申して呉れまして、立候補一件は止めた訳であります。併し尙多少の其方面への野心は残つています次第であります。

斯くの如く私は何の目的もなく、目的の無い訳ではありませんが、マア見込もなく期待もなく人生の流れに棹して参りましたが、世の中と申すものは、不思議なものと申しますか、顧ると四十年も近く、維新史と申す極めて狭き範圍の研究に朝から晩まで毎日没頭しながら、飯を喰つて来たのであります。維新史と申せば日本歴史の内でも僅かに三十年であります。それ丈を四十年近くもやつて飯を食つて来たというのは、此れは百万長者の御曹子も出来ない幸運であります。その幸運を私が天から授かつている。これは誠に難有いことである。斯る幸福を享けながら学界に私がパットしないというのは、実は此の研究が役所の仕事であります。私の研究の史料の蒐集なども官費であります。それからこの史料の蒐集も十数名の同僚の力が加はつている。ですから私は維新史に関する論文などは自分一人の力で出来ているのではないこれをよく心得ている。維新史料編纂会官制の廃止の時に、修史の勳功を以て従三位に叙せられ勳四

等旭日章を拝受いたしました。もう此れで沢山であります。

かくの如く七十年を榮に過して来たのは、偏に渋沢青淵先生金子堅太郎伯田中光頭伯の御蔭であります。尙簡易科小学校時代いろはより教はつた諸先生、中学・高等学校・大学の諸先生方、又社会に押し出して下さつた方として京大関係では坂口昂先生、三浦周行先生、西田直二郎先生、東北帝大関係では古田良一先生、九州帝大関係では長沼賢海先生、警察講習所関係では石原雅二郎君、滿洲国憲法起草関係では金森徳次郎先生、日本歴史地理学会を通しては喜田貞吉先生、藤田明先生、吉田東伍先生、明治文化研究会を通しては吉野作造先生、尾佐竹猛先生、国史会を通しては徳富蘇峰先生、其他山口八十八氏、長尾欽弥氏が米中御世話になつた坂西志保女史方に対し、此際厚く御礼を申します。特に中学修猷館の生徒時代に水井文吉先生の学問上の感化を受けたことを御礼申させて頂きます。

尙私事を申し上げて誠に恐縮ですが、私に健康体を授けて下さつた父母に感謝いたします。父母は老年でありましたので、学生時代休暇中はすべて農業に従事致しました。無銭旅行もして見たい、海水浴にも行つて見たいと思はないではなかつたが、農事に日も足りない。夏の照りつける日芋畑の草取り、反射する地熱と青草の葉のイキレ、今以つて苦しさを覚えてゐますが、それが今日の健康体の基となつています。今は働かせた父母に感謝しています。尙学業に志さして呉れた篠崎辰次郎と申す義兄に対し又私の遊学中老父母の面倒を見て呉れた藤沢元

臣と申す義兄に対して感謝いたしています。私事を申し上げて誠に恐れ入ります。

尙私が若返つてゐる理由の一ツに、私は五十余才までには子供であつたことでもあります。当時私が非常に御世話になり御面倒を見て頂い禮方が皆九十才前後の老人でありました。曰く淡沢青淵子爵、金子堅太郎伯爵、田中光顯伯爵、若い処で徳富蘇峰先生。かつて私が欧米から昭和六年に帰つて参つた時、田中光顯伯爵が岩淵の俺の別荘で暫らく休養せよと申されましたが、私は帰朝の翌日から平常通り出勤している位ですから参らなかつた。すると一日招かれて参つた。同席は本山大毎社長と徳富先生、円卓に四人、御互に年齢の御話が出て私は九十だ、私は八十だ、私は一廻り下の七十だ、と話されているが、私丈は「君は幾才か」と尋ねる方もなかつた。こんな風ですから年の取りようが無かつたのであります。世間ではよく老人は若い人を側に置くのも若返りの一方法と申しますが、老人に交るのも確かに不老の方法と存じます。

左様な次第で、何も私自身でやつたことは、ないのであります。すべて皆様のお蔭によつて、ここまで参つております。従つて自分が偉いというようなことを、確信したことはないのではありません。たゞ身体の強健に任せ、務める丈は一死懸命に努力しています。今日は又皆さまの御同情御尽力によりまして、こうして私古稀の祝宴を開いて下さいましたことは、誠に有難く思つております。よく人からお話があります、君は七十才の

古稀とは思つていない。まだ若い、少し年の鯖読みをしているのじやないか、又先日柳田国男先生は、藤井の七十の祝をするとお聞になつて、いやあれは八十だ、僕が藤井君を知つてからは随分古いのだが八十じやないか、といわれたそうです。その間開きが大部分あります。(笑声)この先も始終お世話になることと思ひます。若い方にもお世話になります。よろしくお願ひいたします。

ここにちよつと一言、私加えて申上げておきたいと思うのでございますが、国許の姉が非常に喜んで、皆様にお礼を申上げる電報を打ちました。私からも姉がお礼を申しておることを、皆様にお伝え申し上げます。それとなお一つ、ここに私の遠い親類であります垣見さんがお出でになつております。これは麹町にお住いになつて和泉屋の屋号で油問屋をお手広くしておられる。実は今日は、宝井馬琴君にでも来て貰つて、一席先祖の御話をお願いしようかと思つておりましたのですが、私から講談として一席申し上げます。私の先祖が、摂州池田の城主池田筑後守の一家老を勤めておりました時に、池田家が断絶を致したので、浪々の身となつた。その時の長男の家の裔が、前女子学習院の教頭佐成謙太郎君の家。これが井伊家に仕え藤井の井の字と、井伊家の井の字を憚り佐成姓となつています。真中の姉が豊後富来の城主垣見和泉守の室になつた。ところが丁度関ヶ原の戦の時、この垣見和泉守が石田方で、大垣に出陣をされる、そこで義弟即ち私の家の先祖が、富来の城の留守番を致

しているうちに、これは黒田博士の前では申上げ難いのですが、黒田如水公から攻められまして、(笑声)夜討をかけ、城を枕に討死をしようということになりましたけれども、あの頃は戦国の際で、今の言葉で申しますと、人的資源を、非常に重く見ていました。降参した者はなるべく助けるということでありまして、既に関ヶ原の戦に勝敗が判つた以上、城を枕にした処で犬死じやないか。おれの方へ来いということで、黒田家にお仕えをいたしましたして何千石かの大変な高祿を頂戴致しておりましたのであります。これが先ほど金子伯が今の甚太郎君が浪沢家に受けた恩は十年、黒田家に受けた恩は三百年だと、言はれたわけでありまして。その先祖の三兄弟の姉の連添の子孫の垣見さんが、この席におみえ下さつておられます。生きております姉が喜ぶのみならず、三百年以前から藤井家の人々も垣見さんを通じて喜んでいられることと、存じます。

尙皆さま方非常なお多忙の際、まげて御出下さいまして貴重な時間をお費し下さいましたことを厚く御礼を申し上げます。甚だ長くなりまして誠に恐縮に存じますが、板沢教授から上野精養軒を選はれた理由のお話がありました。御心尽しの程厚く感謝いたします。今迄の話では藤井は貧乏者であつたのが何でこんな処で披露をしたかと云ふ御疑念があるかと存じますがこれは私が催したのでは無い、(笑声)妻の父萩野由之先生が催されたのであります。今は妻も皴くちや婆であります、その頃は芳紀正に何とやらで美人であつたのであります。(拍手)

思い出しますのはその披露の席に列せられた人々が在東京の史学界の諸先生方でありましたが、今は辻先生渡辺先生位のみ御存生であります。そして其席にハニカンでいた青年の新郎が、七十の老爺になつている始末であります。席上までのこの御心尽し誠に難有存じます。今日の私の気持は、実に言葉に尽せない。どうぞ言外の気持をお汲みとりを願いたいと思つてあります。ありがたく存じます。(拍手)

○藤井光之君(先生の長男)

甚だ高い席から申訳ないのでございますが、御礼を申し上げます。今日は御先輩のかたゝ、御友人のかたゝと相集り下さいます。今日父の寿を祝つて頂きまして、私共家族もお招きに預り私といたしまして非常に感謝いたしております。母も非常に感謝し、特にゆかりの場所を選んで頂いたということについては、非常に喜んでゐることは、私が証明いたします。(笑声)どうも有難うございました。父も老年でありますので、今後とも父のことについては、いろいろ御厄介になると思ひます、どうぞ宜しくお願いいたします。(拍手)

(文責在記録者)

來會者芳名

(敬称略・署名順)

小肥	鮫島	三橋	菊地	後藤	吉村	石村	末松	林野	小野	周藤	芥川	渡辺	小林	佐藤	主賓
川後	和近	島橋	勇次	藤勇	村綾	村吉	松夫	野泰	野秀	藤吉	川二	辺省	林幸	藤進	主賓
常和	男二	近雄	勇次	藤勇	村綾	村吉	松夫	野泰	野秀	藤吉	川二	辺省	林幸	藤進	主賓
人男	二雄	近雄	勇次	藤勇	村綾	村吉	松夫	野泰	野秀	藤吉	川二	辺省	林幸	藤進	主賓
左黒	服部	笠原	中根	岡山	三東	蓼沼	井筒	田中	丸山	岡野	新田	小林	板沢	黒田	藤井
藤田	近寅	部一	根咲	山好	東忠	沼繁	筒調	中久	山公	野他	田質	林夫	沢武	田長	井甚
直近	寅雄	一男	咲好	山好	東忠	沼繁	筒調	中久	山公	野他	田質	林夫	沢武	田長	井甚
助雄	雄雄	男男	好子	介子	枝介	策夫	彦綱	網夫	柴田	小田	関野	酒卷	正三	谷川	藤井
杉大	友島	小島	田中	横大路	龍田	池田	吉田	飯沼	岩生	安岡	山口	柴田	小田	関野	酒卷
本友	島島	小島	田中	横大路	龍田	池田	吉田	飯沼	岩生	安岡	山口	柴田	小田	関野	酒卷
長太	鉦作	健夫	一夫	俊一	三郎	榮三	政一	守一	成一	昭男	榮藏	太(佐賀)	雄	郎	正三
勤郎	作夫	健夫	一夫	俊一	三郎	榮三	政一	守一	成一	昭男	榮藏	太(佐賀)	雄	郎	正三
中八	市古	梅田	篠田	隈田	垣見	伊豆	喜田	末松	寺沢	遠山	上條	小西	岡田	竹内	徹三
沢坂	古宙	田道	田節	田謙	見八	豆野	田新	松保	沢保	山茂	條四	西四	田章	内直	徹三
至筑	宙三	道之	節藏	謙次	八郎	野右	新夕	保和	保和	茂樹	四郎	四郎	章雄	直良	徹三
夫紫	三三	之之	藏藏	次郎	郎門	夕ツ	六六	和和	和和	樹樹	郎郎	郎郎	雄雄	良良	徹三

芥力大三篠田椎齊高時梶向湯
 川丸久橋崎中名藤原野原井淺
 龍又利博仙誠詰健榮景和一
 男次謙義司吉亮治方勝光夫二
 (広島)

劔松笹三西松渡戸柴大井森田
 木田目輪田下辺田田雲上中
 亨善壽謙芳幾正英清克三
 一
 弘等郎壯幸男郎雄徹二恒己雄

小藤丹黒三鍋石安伊杉桃渡
 林井治崎條島田藤藤本辺
 登貞健菊西直幹常光啓善
 志文藏江正康助郎良郎行郎
 子文藏江正康助郎良郎行郎

清福宮坂藤櫻鳥内河吉藤豊
 水地島本野井羽藤原田井岡
 賢重精郵道芳正甲正常為
 子
 藏孝一次生郎雄郎博吉六是